# 新編 現代イギリス文学

篠田一士

小沢コレクション 34

小沢書店

# 新編 現代イギリス文学

篠田一士

江苏工业学院图书馆
藏书章

小沢セレクション34

小沢書店

篠田一士（しのだ・はじめ）
1927.1.23～89.4.13　文芸評論家・英文学者。岐阜市に生まれる。51年，東京大学英文科卒業。57年，東京都立大学人文学部英文科講師，73年から没時まで教授。無類の読書家として知られ，専門の英・米文学にとどまらず，関心はヨーロッパ全域におよび，また，ボルヘスをわが国に最初に紹介するなど，ラテン・アメリカ文学におよんだ。文芸評論では，近代日本の私小説的風土に反撥，つねに作品に即して文学的経験を語った。音楽を愛好し，現代詩の擁護者として，新しい言語の実験に親しく理解を示した。著書に，「日本の近代小説」「日本の現代小説」「現代詩髄脳」（集英社），「現代詩人帖」「二十世紀の十大小説」（新潮社），「伝統と文学」「作品について」「心敬」（筑摩書房），「ヨーロッパの批評言語」（晶文社），「幸田露伴のために」（岩波書店），「音楽の合間に」（音楽之友社）ほかがある。

新編　現代イギリス文学

小沢コレクション　34

1991年10月20日　初版発行

著　者　篠田一士

発行者　長谷川郁夫

発行所　株式会社小沢書店
東京都豊島区雑司谷2-4-1　Tel.(03)5992-2441
印刷　図書印刷　　製本　大口製本

©Ayako Shinoda, 1991　　Printed in Japan

# 新編　現代イギリス文学　目次

現代イギリス文学ふたたび

前口上　9
I　ブルックナー登場　13
II　新しい旅行記をもとめて　25
III　ラーキンの精妙さを核に　37
IV　イギリス批評再見　50
V　成熟の新しさについて　68
VI　一九八〇年代のイギリス文学、いや、ヨーロッパ文学　80
VII　「コモンウェルス文学」の夢のあとに　97
VIII　ひとりの詩人＝批評家のために　115
IX　伝記文学の新生面　127

現代イギリス文学

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

I　ふたりの小説家――モーガンとスノウ　141
II　旅行記について　155
III　三冊の全詩集　171
IV　イギリス批評の現状　189
V　イギリス小説の成熟について　221
VI　五〇年代の神話　234
VII　『アレクサンドリア・クワルテット』瞥見　246
VIII　ある文学的自伝をめぐって　258
IX　ベッジマン・ブームの周辺　270
X　伝記について　283
解説　ジャーナリスト批評家　富士川義之　291
編集後記　302

# 新編 現代イギリス文学

# 現代イギリス文学ふたたび

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

# 前口上

一九六二年といえば、二十四年も昔、もうすっかり忘れていい頃だが、この年、ぼくは『現代イギリス文学』と題する本を出した。題名はもっともらしく、なにか概観書めいた物物しさだが、実はそれより四年まえ、すなわち一九五八年から二年半にわたって、当時、丸善から刊行されていた、同人誌「聲」の海外文学紹介欄に連載した文章を一本にまとめたものである。

つまり、新刊紹介というわけだが、なにしろ、一回が二十五枚前後という、この種のものとしては破格の枚数を与えられていたため、たんなる報告記事ではなく、多少とも批評的な内容を盛りこんだエッセーを書くべく努力するのが、当然の務めだろうと、われわれ一同、覚悟を新たにして、筆をとったものである。

われわれというのは、フランスの白井浩司、ドイツの原田義人、アメリカの佐伯彰一の諸氏というか、諸先輩で、それにイギリスのぼくが加わり、都合四人だった。だが、原田さんは、連載の途中で、不幸な病患のため、四十二歳の生涯を終えられた。この気鋭のドイツ文学研究家の名前は、いまの若い読者には、ずいぶん縁遠いものとなってしまったが、数多くの訳業や

紹介文は別としても、日本の戦後の文学創造の楽屋裏で、彼が、かぎりなく優しい気くばりを発揮し、貴重な円滑油としての役割を果した功績は、案外と知られていないが、これは今後の文学史家の考察に値する事柄ではあるまいかと、ぼくなどは、つねづね期待している。さいわい、公私ともども、この先輩にはいろいろと御世話になり、初心のぼくに、心こもった教導のかずかずを御示しいただいた後輩のひとりとして、遅ればせながらも、感謝の気持を表わそうと、『現代イギリス文学』を編んだ際、巻頭にホーラチウスの詩句に託した、追悼の献辞を書きつけたのである。

ところで、この『現代イギリス文学』には、詩、小説、批評はもちろん、伝記や自伝、さらに、文学運動といった現象をも話題にし、一応、できるかぎり目配りをひろくしたつもりだが、演劇だけは抜けている。ぼくは、演劇は舞台にかかって、はじめて作品として完成されるので、台本を読むだけで舞台の見聞もなく、批評の筆を下すのは不届きなことだと考えつづけてきたため、あえて、演劇に関しては、口をつぐむしかなかったのである。レーゼドラマなるものが存在していることは承知しているし、その効験についても、身におぼえがないわけではないが、やはり、演劇は舞台で観て聴くものだという年来の考え方は、今日においてもなんら変らない。もっとも、これは建前論で、小声で本音を言えば、劇場へ行く時間があったら、その暇を使って、音楽会のホールへ出かけたいという、ぼく個人の私事の好みがあって、折角の建前論も、なかなか実行に移すことができないのである。われながら、我儘勝手な話で、そのために、もっともらしい建前論をふりかざしているようだが、ひとつには、新劇運動以来、日本の演劇が、

なにか中途半端のところで、文学、つまり、主として小説と癒着、野合してきたため、かえって、演劇の一番大切なものを見失ってしまっているのではないかという、ぼくなりの危惧の思いがあって、それが、わかりきった建前論を、あえて人前で公言させてきた事情もないではないが、まあ、これは陰の声ということにしておこうか。

いずれにしても、ぼくの現代イギリス文学の見取図には、一九五〇年代から六〇年代にかけて、めざましい活躍をし、劇壇に画期的な革新を実現した、ジョン・オズボーンをはじめ、アーノルド・ウェスカー、ハロルド・ピンターといった劇作家の存在は、まったく無視されている。片手落ちもはなはだしいと言われれば、まさにその通りと、素直に頭を下げるばかりである。だが、そういうことを言いだせば、この本で取りあげた、詩、小説、批評のジャンルについても、事実報告といった情報提供の点では、不十分もいいところ、少なくとも偏頗なものであることは、筆者のぼく自身が、だれよりもよく承知している。つまり、現代イギリス文学というものの、ニューズの網羅性は二の次、三の次にして、自分なりに、現代のイギリス文学をどういう風に受けとめたか、その一端を走り書きのように記しながら、そこに文学経験とよぶにふさわしい読書のよろこびの端緒を見出そうとする試みだったのである。

最近、この旧著を読んでくれた若い人が、奇特というか、ぜひ再刊したいと、親切な申出をしてくれた。躊躇はしたものの、それならば、折角の好意に甘えるばかりでは曲のない話だから、現在のぼくが、目のまえのイギリス文学について、どう考えているかを、旧著の各章に即しながら、書いてみようかと思い立った次第である。

イギリス文学を読み、教えることを、半ば業としながらも、いたって不勉強、生まじめな学生の言い草ではないが、「もっとイギリス文学に暖かくしてやって下さい」と言われる始末では、われながら、どんな意見を書きつけることができるか、はなはだ心許ないが、旧著の文章を書いてから二十八年、なにがしかでも新しい経験の報告ができるのではないかと、なにか他人事みたいに、スリリングな期待を、とりあえず自分自身に負わせてみたいのである。

# I　ブルックナー登場

さて、話は小説からはじめなくてはならない。旧著の第一章「ふたりの小説家」では、チャールズ・モーガンとC・P・スノウのふたりを話題にしているものの、結局のところ論題は、モーガンの『泉』、スノウの『富める者の良心』にと、それぞれの作家の一作にしぼられてゆく。『泉』は戦前もいいところ、一九三二年に発表された小説で、どうして、そんな古めかしい作品を取りあげたかといえば、たまたま、このエッセーを書いた一九五八年に、モーガンが亡くなり、追悼文を装いながら、この忘れられた傑作を、もう一度、思いだしてもらおうと考えたからである。しかし、それだけではない。ぼくの本当の真意は、『泉』それ自体も大事だが、この小説を、なにかロマンス風の純愛通俗小説として一蹴してきた、イギリスの文学風土というか、イギリス人の小説の読み方に対する反撥を表明することで、それと対照的に、それならば、もっともイギリス的な小説はなにかという意味合いから、当時発表されたばかりの、スノウの小説をえらんだのである。

もう少し丁寧に言い直すならば、『泉』のなかに、魂の静謐をもとめて、すさまじい求心力で内面世界を懸命に形づくってゆく、修道士の行にも似た形而上的な営為の成果を認め、これに賞讃の花束を贈ったフランスの批評界、つまり、フランス人の小説の読み方、そして、フランスの小説創造のありようと、イギリスのそれとがどのように違うか、この隔りを素描でもいいから、あきらかにしたかったということになるだろう。なぜ、そんな比較論が必要かといえば、もちろん比較それ自体に興味があるのではなく、フランスの鏡によって、イギリス、つまり、イギリス小説の本質がどういうものか、それを少しでも鮮明にしたかったからだ。それと、もうひとつ、イギリスとフランスの小説は、十八世紀以来の近代ヨーロッパ小説の創造と展開において、それぞれ相補いながら、かけがえのない決定的な成果と役割を果してきた、いや、いまなお、その大きな支柱となっている以上、いくらイギリス小説といっても、これを孤立した、単独のものと考えることはできない。どうしても、ヨーロッパ小説というコンテクストのなかで、イギリス小説の創造の独自性を考え、その意味合いを読みとるのが、とりわけ、われわれ非ヨーロッパ圏の読者にとっては、なによりも大切な経験の手立てだろうというのが、ぼくの絶えて変らぬ文学読書法なのである。

『泉』も、『富める者の良心』も、当時は日本語で読めなかったが、『泉』はまもなく、小佐井伸二の、大変心のこもった名訳ができた。『富める者の良心』は、この一冊を第三巻に据えた、連作の大河小説『見知らぬ者たちと兄弟たち』全十一巻のうち、第六巻に当る原子力工場の科学者たちを主人公にした、『新しい人たち』が翻訳されたものの、さっぱり評判にならない。



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.